# 神宮、参上！

**今季から決勝トーナメントの舞台は、東京・明治神宮野球場に場所を移す。毎年、全チームが最後の最後での勝利を目指して長いシーズンを戦うが、戸田中央総合病院とSGホールディングスの両チームは、近年8位、9位に終わっている。新たな決勝の舞台に向け、定位置から抜け出し、4強へ割って入るための策、思いとは。**

## 浮き沈みを経て同じ8位

昨年10月、東京ヤクルトスワローズが14年ぶりのリーグ優勝を成し遂げて大きく沸いた明治神宮野球場。2020年東京オリンピックのメーン会場となる明治神宮外苑周辺はすでに工事が進み、日々様相が変わりつつあるが、この球場はたたずまいを変えていない。ただ、オリンピック後には神宮球場は取り壊され、すぐ横の秩父宮ラグビー場跡地に新球場の建設が予定され、現球場跡地には代わりのラグビー場が建てられる計画がある。

そんな神宮球場で今季の女子1部リーグ決勝トーナメントが開催されるわけだが、埼玉県戸田市に本拠を置く戸田中央総合病院にとっては神宮球場までの直線距離は15・6キロ。12チームの中で最も〝近い〟。

「もし私たちがそこで戦うことになれば、病院から近いので応援に来てくださる方たちも多くなると思います。絶対に、今年こそ決勝トーナメントに行きたい。そう考えてチームをスタートさせています」（新主将・小沢佳那子）

戸田中央総合病院の決勝トーナメント出場は、のちの金メダリスト・坂井寛子をエースに擁しての03年（リーグ4位）までさかのぼらなければならない。05年から6シーズンは負け越しが続き、11年は2部降格の憂き目にも遭っている。最短で1部復帰してからの直近4年も8位、9位が定位置となっている。4強に割って入るにはなかなかに壁が高い。

ただ、昨季は負け越しでも見せ場はつくった。昨季のスタートは最高だった。開幕節の日立戦を逆転勝利。先制された直後の2回裏に上原依万里が同点打を放ち、4回には川島怜那が勝ち越し2点二塁打で主導権を手にする。大事な試合の先発を任された五味彩華は最後まで一人で投げ切り失点2で勝利投手となった。

「格上のチーム相手に、ひっくり返して勝ったのは本当に大きかった。なんとか粘って、守備でもいいポジショニ

▲昨季開幕節の日立戦は接戦をモノに。今季はその再現からスタートして、4強へ食い込んでみせる

TMG Toda Medical Group

# 戸田中央総合病院 Medics

2016 4強？ ↑ 2015 8位

## 15.6キロ先のスカイブルーの下で

取材・文／山内浩太　写真／BBM

ングでピンチをしのいだ。1年戦っていく上で自信のつく1勝でした」

日立マクセルから移籍して今季で3年目の篠田美穂は、昨季の開幕戦をこう振り返る。今季は〝現場監督〟として練習メニュー立案も任されている。

「でも、結局前半戦は4つしか勝てなかった。落とせない試合を大敗したり、接戦になっても勝てなかった」（篠田）

投手が安易に先頭打者の出塁を許し、四死球も絡んで、気付けば塁を埋められる。そこに野手のエラーが加わり、簡単に失点を許す。フラストレーションがたまる試合展開が続いた。篠田は上位チームとの差を「基本プレーの精度と質」と言うが、わずかなほころびが試合後には勝敗という形で明確に表れたという。

前半を4勝9敗で折り返し、チームは急きょの改造に取りかかり、新たに監督とコーチが据えられ、「すごく大人のピッチャー」（五味）というサラ・パウリーが加わる。その甲斐あってか、後半戦は同じ4勝の上積みだったが、リーグを盛り上げる存在となった。決勝トーナメントを目指す日立と、上位の太陽誘電を撃破。「後半戦、チームがようやく一つにまとまったように思う。最後の3試合は本当にいい形で終われました。あの戦い方を今シーズンは最初から出せるようにしないといけませんね」（五味）

第10節の3連戦。初戦の太陽誘電戦では初回に一番・坂本結愛の先制弾など2本塁打で先制してそのまま逃げ切り（4対3）。2戦目のビックカメラ高崎戦は五味が上野由岐子と緊張感に包まれた投手戦を展開（1対2）。そして最後のデンソー戦は前日同様のスコアで敗れるも、上位3チーム相手にきん差のゲーム展開を広げた。高卒1年目ながら一塁手レギュラーとして1年間戦い続け、夏にはU19世界女子ジュニア選手権で銀メダルに輝いた坂本はこう振り返る。

「U19で世界を見てきたことが刺激になったし、大きな力になりました。後半戦は自分の中で何かが変わって、前半戦にスピードに翻ろうされていたリーグの投手の球が速く感じなくなったんです。でも、悔しい1年。もっと打てたと思うんです」

坂本に限らず、光が差した後半戦といえども、リーグ戦の成績は前年同様の8勝14敗で8位。バタバタした前半戦を踏まえれば及第点という見方もあるが、誰一人として満足していない。リーグ全体でみれば最後までもつれた決勝トーナメント争いに加わることもなかった。

「8位、9位はもういい。今季こそ4位以上を狙いに行きます。でも、そのためには何が必要なのか。選手個々が自分にベクトルを向けて個々のレベルアップを図る。チームワークはそれからです。なんでもプラスに考えて、挑戦する1年にしていきます」（小沢）

## 変わるチームの中で

戸田中央総合病院は2月、「雨に降られない環境で集中したい」という理由から静岡・天城ドームで2度の短期合宿を行った。普段は午前中、病院内で制服に身を包み、訪れる患者たちの力になっている。小沢は産院科の受付業務に就き、「毎日赤ちゃんの泣き声を聞いて新鮮な気持ちになります」と笑う。そして午後、ユニフォームに着替えて向かうグラウンドは専用ではないが、利用する道満グラウンドや川口グラウンドは地元の協力もあって優先的に利用できている。

「トレーナーが二人体制になり、就業時間も1時間繰り上がりました。最大限のバックアップをしてもらっているので、それに応えるためにも決勝トーナメント、です」（篠田）

昨季のチームから7名が去り、その中には10番を背負った萩原瑠美、12年新人賞野手の村井美保が含まれる。

投手陣の柱となる五味（写真上）、打線の斬り込み隊長役を担う坂本（写真右）。さらに新主将の小沢や移籍の萩原（写真右上内左から）など、能力の高い選手がそろう。チームとしては走塁、ランダウンプレー（写真下）など、基礎の精度を上げて今季に臨む

**戸田中央総合病院**
**過去5年間のリーグ順位**

| | | |
|---|---|---|
| 2015年 | 1部／8位 | 8勝14敗 |
| 2014年 | 1部／8位 | 8勝14敗 |
| 2013年 | 1部／9位 | 7勝15敗 |
| 2012年 | 1部／9位 | 10勝12敗 |
| 2011年 | 2部ホ／1位 | 13勝 1敗 |

「リーグ5年目の私がチームの中では中堅。若返りますが、それだけのびしろがあるということですよね」と、遊撃手の上原。高卒2名、大卒4名、そしてペヤングから移籍のリーグ6年目の荻原美也子、新たに外国人捕手も加わり、昨季後半戦の柱となったパウリーも残留。小沢が心強いと信頼を寄せる荻原は、「私の役割は、左の長距離バッター。年下の多いチームですが、『オギさん、オギさん』と気にかけてくれています。このチームのために、全力を尽くします」と気持ちを新たにしている。

練習では小沢と荻原がランダウンプレー時の連係をじっくり確認し合う光景が見られ、もっと見渡せばチーム全体で逐一互いのプレーを指摘しているのが目につく。打撃練習で群を抜く飛距離を出していた高卒4年目の捕手、松村華子は「新しい選手も多いので、コミュニケーションは去年よりも格段に増えています。私は人より声が人一倍大きいので、そういうところでも盛り上げたいですね」と、さわやかに応えてくれた。

端から見ればチームの3分の1が入れ替われば次の構築に戸惑うものかと思いきや、当の選手たちはこの新陳代謝すら楽しんでいるように映る。空いたポジションを狙う競争が繰り広げられ、「ショートは誰にも渡すつもりはありません」という上原のようなレギュラーたちも両目に火をともしている。

この状況を、投手の五味は別の角度から見ている。

「チームがガラッと変わったという点は、去年のスタート時もそうでした。だから、同じことをやっていてはダメですよね。私自身、期待されながら結果をまったく出せませんでした。自分のスタイルを見つめ直して、すべてのボールの精度を上げて臨みます」

開幕節のQVCマリンフィールドは、五味の地元・千葉。「投げられることがすごく楽しみだし、最後は神宮で投げたい。チームの歴史を変えたいです」と、心に期すものがある。

今季のチームスローガンは、「応援されるチームになろう」。勝利を大前提に、仕事も含めて自分たちの置かれている環境が人に支えられていることを忘れず、社会人としても大事なことを見つめ直そう。選手間で決めた合言葉だ。

日が落ちてボールが使えなくなったころ、最後に全員で大きな声を出しながらチューブを使ったラントレーニング。BGMには、桑田佳祐の「波乗りジョニー」がかかっていた。「青い渚を走り」というフレーズで始まるこの歌に、スカイブルーがチームカラーの選手たちと妙にリンクした。走り出した先に待つのは11月の神宮球場。15・6キロは遠くない。

# 神宮、参上!
## 戸田中央総合病院

「絶対に決勝トーナメント。これを目標にスタートしています」(小沢)

「チームが若くても、のびしろがあるということ」(上原)

「神宮で投げてチームの歴史を変えたいです」(五味)